

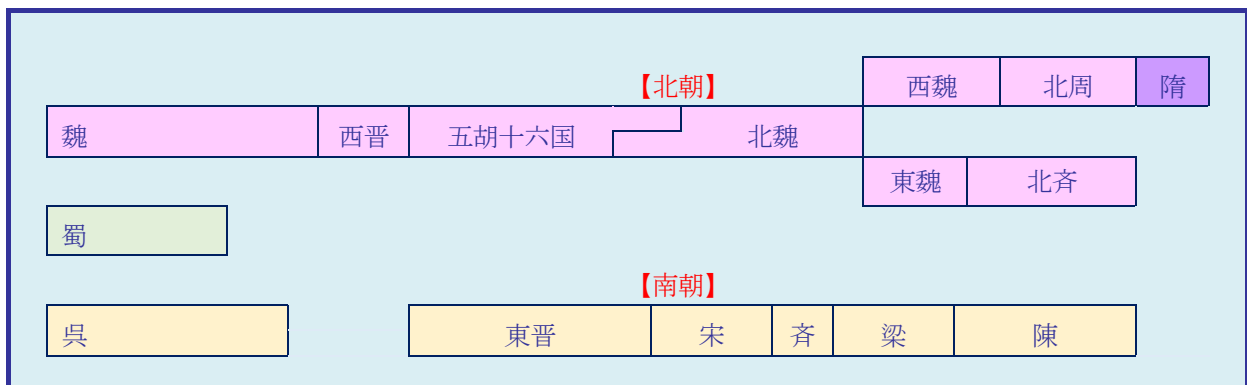
第6章 古代の東アジア情勢

① 3世紀～6世紀の中国

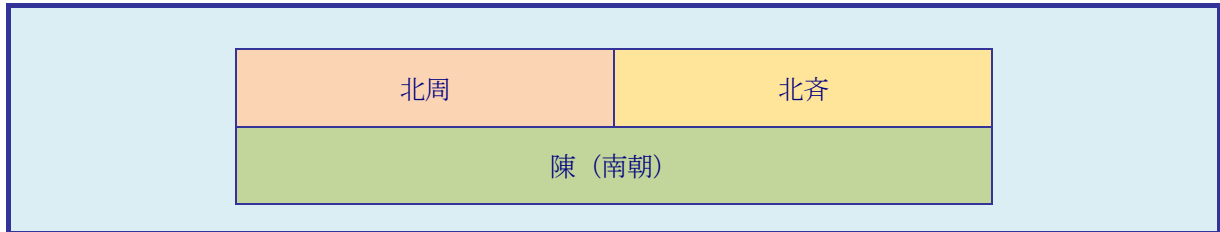
(1) 魏晉南北朝時代から隋の統一まで

中国大陸では、三世紀前半に後漢が魏によって滅ぼされると、魏・呉・蜀の三国に分割される。やがて魏が蜀を滅ぼすが、魏は家臣の司馬炎によって滅ぼされる。司馬炎は武帝となって晋(西晋)を建国し、呉を滅ぼして280年には中国を統一する。しかし、次の恵帝の時、皇帝の後継者争い(八王の乱)が起こる。この八王の乱の過程で、兵力として活躍したのが北方や西方の匈奴・鮮卑・羯・氐・羌の諸民族であった。やがて彼らは勢力を拡大して各地に独自政権を打ち立てる。この影響を受け西晋は滅び、五胡十六国が興亡を繰り返す時代になる。

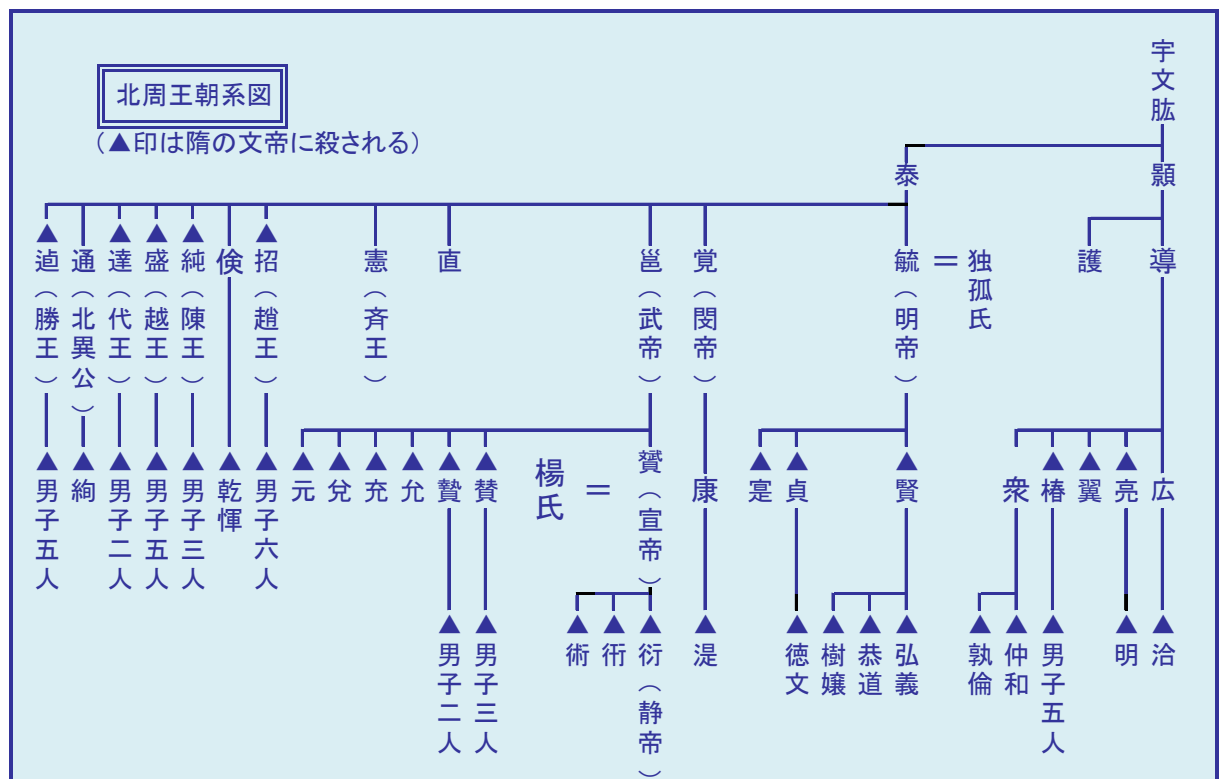
五胡十六国時代を終わらせたのが北魏である。北魏は鮮卑族の拓跋氏が建国した国で、三代皇帝太武帝の時の439年に華北を統一する。皇帝家は中国人豪族と婚姻関係を結ぶことによって大多数の中国人を支配する体制を築いていく。この国は遊牧民族の鮮卑族の国であったが、一旦華北に入り込んでしまうと、今度は新たな遊牧民族の柔然の侵略に備えなければならなくなった。そこで、万里の長城の北側、陰山山脈に沿って前線基地を何箇所か設けた。そして、そこには鮮卑族や中国人を駐屯させて国防に当たらせた。これを「鎮」という。「鎮」の軍事集団は鮮卑族と中国人の混成集団であったが、辺境の防衛の苦勞を共にするという環境の中で、強い団結力を持ち、さらに、両者が雑婚を繰り返すうちに、「鎮」は強固な家族的性格を持つようになった。「鎮」の軍人たちは、元来、良家の出であって、仕官の途も開かれていた。ところが、439年、第六代の孝文帝の治世に行われた洛陽への遷都や厳しい漢化政策の断行によって、「鎮」の人々は中央政府から置き去りにされる形で、時と共に冷遇されていくようになる。このような処遇に対し、「沃野鎮」、「懷朔鎮」、「武川鎮」、「撫冥鎮」、「柔玄鎮」、「懷荒鎮」の六つの鎮を中心とする「六鎮の乱」という大反乱が起こる。この反乱が引き金となり、北魏は東魏と西魏に分立する。



東方の東魏は懷朔鎮出身の高歡が実権を握り、やがて北齊王朝を樹立する。しかし、南朝の貴族文化の影響を受けて自滅的な解体をしていく。一方、西方の西魏は武川鎮出身の宇文泰が実権を握り、やがて宇文泰の長子、宇文覺が自ら天子(孝閔帝)となって、北周王朝を樹立する(557年)。北周は北齊とは違って武川鎮軍閥の固い団結力によって統治され、発展していく。



北周の第3代皇帝武帝は北齊の衰弱ぶりを見てとると、国民を総動員して北齊を攻め、山東政権を倒した(577年)。しかし、武帝が亡くなると、皇太子の宇文贇が即位して宣帝となるが、これが暗君であった。即位の翌年、僅か七歳の皇太子の宇文衍(静帝)に位を譲り、自らは上皇となって政治をせずに放縱生活に浸り、二十二歳の若さで死んでしまう。この後、外戚(皇后の父)の楊堅が実権を握り、随王に封ぜられる。その翌年、楊堅は幼帝から禅譲を受けて即位する。すなわち、隋の高祖文帝の誕生である(581年)。文帝は残存する旧北周王室の宇文氏を皆殺しにすると、旧北齊領を含む華北全域を安定させ、軍事力を整え、江南の陳王朝を制圧する。これにより南北朝に分かれていた中国は、隋によって統一される(589年)。



『隋の煬帝』宮崎市定(中公文庫)より借用

(2) 隋の統一

楊堅は581年に即位して文帝になると、翌年にこれまでの前漢から北周まで続いた長安城を捨てて、その東南に新都を建造した。文帝がまだ若いときに大興郡公という爵位に封ぜられたのに因んで大興城と名付けられた。この新しい城は次の唐王朝に引き継がれ、日本の平城京・平安京の模範となった。

文帝は583年に大興城に入城すると、最初に地方制度の改革に着手する。魏晋以降続いていた〈州—郡—県〉の三階の行政区分を改め、〈州—県〉の二階の行政区分に改編した。それまで211の州の下に508の郡があり、さらにその下に1124の県があったが、1州がおよそ5県を管轄することになった。これによって、地方役人の冗員を整理し、行政事務を簡素化するとともに、地方長官が持っていた辟召権(属僚採用権)を廃止し、州県官の人事権を中央がとりあげた。しかし、地方の属僚採用権が中央に移ったことにより、中央では莫大な人数の官僚予備軍を備えておかなければならなくなった。そこで文帝は魏から続いていた九品官人法を廃止し、学科試験による官吏登用制度を始めた。それが「科挙」である。(中国では官吏を選任することを「選挙」というが、試験には種々の科目があったので、科目による選挙、略して「科挙」と称されるようになった。) このように、文帝は門閥貴族の官職独占を阻止し、君主権の強化を図った。

604年、文帝が在位24年で薨ずると、第二子皇太子の楊広が即位して煬帝(在位604～618)となった。文帝の時代は戦乱の後であったため、民を疲弊させるような大土木工事は控え、専ら国力の充実が図られたが、煬帝は父の遺した黒字財政の余剰積立を運河の建設に充て、605年、黄河と淮水を結ぶ通済渠を開削した。これによって、都のある長安から広通渠→黄河→通済渠→淮水→邗溝→江都まで、船運がつつがなく往来できるようになった。(このうち、広通渠と邗溝は文帝の治世の584年と587年にそれぞれ開削されていた。) 第二期目の工事は608年に開始された。一つは黄河から北へ、現在の北京近くの涿郡にまで永済渠を開削した。もう一つは長江から南へ、太湖の側を経て杭州で钱塘江口に接続した。煬帝によって整備された大運河は全長 1500kmにも達し、文字通り東西南北の交通路が整い、人と物の流通が盛んになった。



昔から中国で統一王朝が誕生すると、周辺諸国は使節を送り臣従の意思を示すことで、自国の安全保障を図るのが普通であった。これを冊封さくほうという。隋が中国を統一した時にも、周辺諸国は冊封を受けたが、高句麗は陳が隋に滅ぼされたことを知ると、東突厥ひがしとっけつと同盟を結んで隋に対抗しようとした。この事情を知るようになった煬帝は、永濟渠が開通するのを待って、612年、兵と物資を涿郡たくくんに集め、陸路大軍を率いて高句麗に親征した。しかし、隋軍は遼東城で待ち構えていた高句麗軍に苦戦を強いられる。一方、海路から高句麗の平壤城に攻め入った水軍も高句麗のゲリラ戦法にやられ、結局、隋は何十万人という兵士を失って大敗する。613年、煬帝は再度高句麗遠征を行なうが、味方の兵站基地へいたんの総司令官に謀反を起こされ、遠征は中止を余儀なくされる。反乱を鎮めた煬帝は、翌年、三たび高句麗遠征を断行するが、陣中に飢餓と悪病が広まり、同時に国内各地で反乱が相次いで起こり、仕方なく高句麗と和睦を結び撤退するしかなかった。しかし、民衆の怒りは鎮まることはなく、各地の反乱はさらに増え、隋は滅亡へと向かう。

時代は少し遡ること、607年、聖徳太子が小野妹子を隋に遣わして煬帝に国書を出している。そのときの様子が『隋書』倭国伝に記されている。それによると、煬帝は倭国からの国書に怒りを表している。理由は倭の王が自ら「天子」と名乗ったからである。中国の思想では「天」の命を受けた者が「天子」として天下を支配することができる。当然、「天子」はこの世に一人しかいない。天命思想は中国の政治思想の根幹であるので、煬帝が怒るのは当然のことである。しかし、怒ったはずの煬帝が、翌年小野妹子が帰国する際、裴世清はいせいせいを国使として日本に遣わしている。これはどういうことか。ちょうどその頃、煬帝は高句麗遠征を決め、準備を整えている時であった。高句麗が倭国と手を結ぶことを恐れて、煬帝は倭国と外交関係を築こうとしたのだろうと言われている。

【書き下し文】

「大業三年、その王※多利思比孤、使を遣わして朝貢す。使者いわく、『聞く、海西の※菩薩天子、重ねて仏法を興すと。故に遣わして朝拝せしめ、兼ねて※沙門数十人、来て仏法を学ぶ』と。その国書にいわく、『日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す、恙つつがなきや、云々』と。帝、これを覽て悦ばず、鴻臚卿こうろけいに言っていわく、『蛮夷の書、無礼なる者あり、復た以て聞する勿れ』と。」

※多利思比孤…大王を表す

※菩薩天子…仏教の復興に尽力した初代文帝(在位581~604)

※沙門…修行僧

【和訳】

「大業三年(607年)、その王多利思比孤が、使者(小野妹子)を遣わして(隋に)朝貢した。その使者が言うには『海の西方に菩薩と仰がれる天子が、再び仏法を盛んにされている、と聞いている。そこで使者を遣わして朝拝させ、併せて沙門数十人を中国に來させて仏法を学ばせたいのです』と。その国書には、『日が昇るところの天子が、書を日が沈むところの天子に送ります、恙なく息災そくさいでありますか、云々』と。煬帝はこれを見て気分を害し、鴻臚卿(外相)に命じた、『蛮夷(倭国)の書は、無礼なところがある。再び奏聞するには及ばぬぞ』と。」

② 朝鮮半島

(1) 古朝鮮

朝鮮半島の記録上の人間の歴史は「古朝鮮」から始まる。「古朝鮮」とは近世の朝鮮王朝(1392～1896)に対し、古代の三つの王朝、つまり、『壇君朝鮮』・『箕子朝鮮』・『衛氏朝鮮』の総称として用いられる。このうち、実在が確認されているのは『衛氏朝鮮』だけであり、他の二つは神話上の、或は伝説上の王朝であると言われている。

① 壇君朝鮮

壇君朝鮮についての伝承は、高麗の僧、一然^{いちねん}(1206～1289)が編纂した歴史書の『三国遺事』^{さんごくいじ}に見られるが、次のように記されている。

【『三国遺事』大意】

『魏書』に因ると、今から二千年前壇君王儉が阿斯達に都を定め、新しい国を建て朝鮮と称した。これは中国の堯帝と同じ時代のことであった。古記に因れば、昔、神様(帝釈天)の庶子で、棺雄という者が地上界に関心を持ち、人間世界を治めたいと考えた。父の桓因は子の思いを見抜いて、太白山に降りてみると、治めるに相応しい世界だと判断し、天符印を三つ与え人間世界を治めさせることにした。桓雄は人間世界を治めるために、従者3000人を引き連れ、太白山山頂の神檀樹のもとに降臨した。風の神・雨の神・雲の神を連れ、穀物・生命・病気・刑罰・善悪など人間社会の三百六十あまりの事柄について人々に教えを説いた。ある時、桓雄の前に人間になりたいという熊と虎が現れた。桓雄は一握りの蓬と大蒜二十個を与え、「お前たち、これを食べれば百日間光を見ずに洞窟の中で過ごすことができれば人間になることができるだろう」と言った。忍耐力のない虎は途中で根を上げ洞窟の外へ出てしまうが、熊は忌むこと二十一日目に人間の女に成り得た。すると、人間の女になった熊女は桓雄に対し、「夫になる者がいないので子を産むことができない」と訴えた。その願いを訊くと、桓雄は熊女と結ばれ、熊女は身ごもって子を産んだ。その子こそ古朝鮮建国の始祖とされる壇君王儉である。壇君は中国の堯帝即位五十年に、平壤城を都とし、初めて朝鮮と称した。国を治めること千五百年で、周の武王が箕子を朝鮮に封じたので、壇君は隠退して阿斯達の山神となった。齡、一千九百八歳であった。

② 箕子朝鮮

箕子朝鮮については、前漢の時代に書かれた司馬遷(紀元前145～紀元前87)の『史記』にその記述が見られる。それによると次のように記されている。

【『史記—世家第八卷—』大意】

箕子は中国殷朝末期の聖人、殷の紂王の無軌道ぶりを諫めるが、紂王を説得することができなかった。そこで彼は自分の正しさを主張することは、君子の悪事を世に広めることになると言いつて、狂人のふりをする。やがて周が殷を滅ぼすと、周の武王は箕子を崇めて家臣とはせず、東方の朝鮮に封じた。箕子は礼儀や田作・織作を教え、犯禁八条を作って生活の規範にした。

檀君朝鮮の神話は、高麗時代に北方の異民族の侵略の中から生まれた民族主義的な思潮として、被支配者階級の農民の間に広まったと言われている。一方、箕子朝鮮の伝説は、高麗時代の儒学者たちによる儒教の流布と尚古思想の発展によって広まった支配者階級のための思想と言える。言い換えれば、檀君朝鮮は朝鮮出自の神話であり、箕子朝鮮は中国出自の伝承であると言える。現代の朝鮮半島の人々が檀君神話を大切に思うのはもっともなことである。

③衛氏朝鮮

古朝鮮のうち、現在のところその実在が確実視されているのは衛氏朝鮮だけだと言われている。衛氏朝鮮の建国は中国の前漢の成立と関わりがある。高祖劉邦が中国を統一して前漢を建てるのが紀元前202年である。漢はその広大な領土を治めるために都の長安を中心とする地域は直轄地として直接支配するが、周辺部は皇族一族や建国の功臣たちに封国として与え、その支配を任せていた。しかし、高祖とつづく皇后呂后^{りょこう}の時代に功臣の王国の取り潰しが始まった。高祖の幼馴染^{ろわん}の盧縮が領有していた東北部の燕の国も例外ではなかった。危険を感じた盧縮は匈奴へ亡命し、家臣の衛満は徒党 1, 000人余りを率いて朝鮮へと逃げた。紀元前195年のことである。このときの経過は『史記』の朝鮮列伝に詳しく記述されている。

【『史記－朝鮮列伝第五十五－』大意】

朝鮮王の衛満はもと燕の国の人である。燕はかつて真番（鴨緑江以西）・朝鮮（鴨緑江以東）を攻略して服属させ、役人を置き、要塞を築いて統治していた。秦が燕を滅ぼすと、遼東郡の国境外の地まで領有した。ついで漢が成立するが、それらの地が遠方で守備しにくいという理由で、再び遼東のもとの要塞を修復し、涇水（鴨緑江説、遼河説がある）までを境とし、燕国の領土とした。燕王盧縮が漢に背いて匈奴に逃げたとき、衛満も亡命し、徒党千余人を集め、髪を椎型に結い蛮夷の衣服を着、東に走って要塞を出、涇水を渡り、秦の時代には誰も住んでいなかった朝鮮を根拠地とした。その後、真番郡・朝鮮の蛮夷及びもとの燕・斉の亡命者らを部下にして朝鮮の王となり、王險（現、平壤）に都した。

朝鮮王となった衛満は遼東太守との間で漢の外臣になることを約束するが、すぐにその約束を反故にし、周辺の小国に侵攻し、臨屯国・真番国をも服属し、その領土は数千里四方に及んだという。満の孫、右渠^{うきよ}の時代になると、漢からの亡命者も多くなり、右渠は漢に朝貢しないばかりか、真番周辺諸国の漢への朝貢の妨害もした。ここに至り、漢の武帝は、紀元前109年に衛氏朝鮮を攻め、翌年これを滅ぼした。

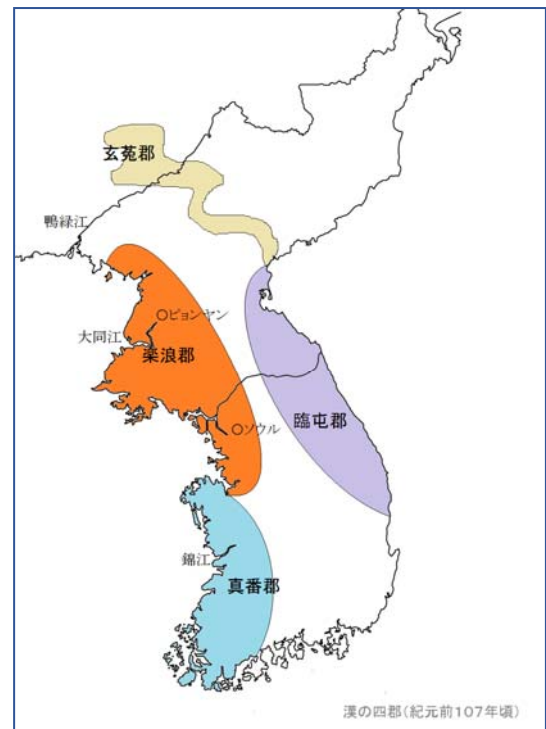
紀元前二～紀元前一世紀の頃の武帝の治世は前漢の全盛時代として知られているが、同時に、対外政策においてはそれまでの消極策から積極策への転換期でもあった。時代は遡るが、前漢建国者の高祖劉邦は、秦が厳しい政治を行なったために、諸侯や民衆の反発を招いて滅亡したことをふまえ、内政はもちろん対外政策においても消極主義をとった。そのため、高祖は匈奴に敗れ、毎年多額の物品を贈るという屈辱的な和約を結ばされていたのである。

ところが今、十六歳で即位した青年皇帝の武帝は、祖先の退嬰政策を踏襲するのを好まず、従来の方針を改め、攻勢的な積極政策に転じたのである。北方の匈奴に大打撃を与えることに成功すると、南の南越(ベトナム)を討ち、西の大宛(フェルガナ)を討ち、東の衛氏朝鮮を討ったのである。武帝は衛氏朝鮮を滅ぼした後、紀元前108年に、その地に楽浪郡・玄菟郡・真番郡・臨屯郡の四郡を置き、漢の直轄地とした。これは「古朝鮮」の終わりを告げる出来事でもあった。

(2) 楽浪四郡の設置

紀元前108年、前漢の武帝は衛氏朝鮮の故地に楽浪郡を、楽浪郡の東、朝鮮半島の東海岸を中心に臨屯郡を、楽浪郡の近くの海岸地域に真番郡を置いた。(真番郡の所在地については古くから北在説、南在説があり、さらに南在説の場合は西部説と東部説があるが、ここでは西部説を進めていく。) また一年遅れて鴨緑江の中流域から東海岸に達するまでの地域に玄菟郡を置いた。

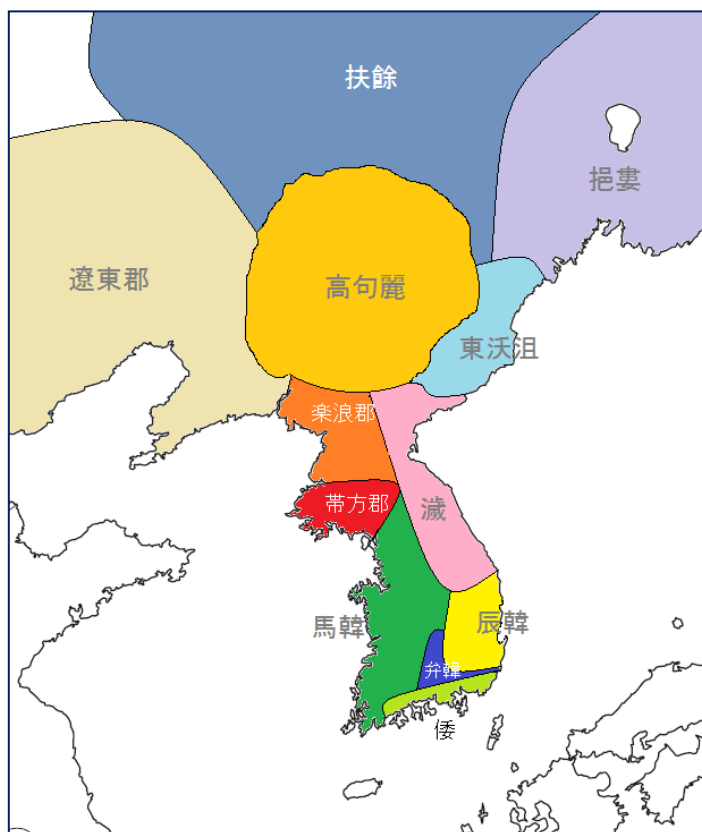
郡の下には県が置かれた。設立当初の県数は、楽浪郡が十八県、臨屯郡が十五県、真番郡も十五県、玄菟郡は最低四県あったと言われている。郡の長官の太守や県の長官の県令は漢の中央政府から派遣された。このようにして漢の郡県制による朝鮮支配が始まるが、郡県支配による収奪と旧



秩序の破壊がこの地方の住民の政治的結束を促したために、漢はすぐに四郡の改編を始めた。紀元前82年に真番郡と臨屯郡の二郡が廃止され、二郡に属していたいくつかの県は楽浪郡と玄菟郡に吸収されることになる。さらに紀元前75年になると、玄菟郡は郡治の置かれていた沃沮県と元臨屯郡に属していた六県を合わせて七県を楽浪郡に転属させ、郡治を西北の高句麗県に移動させた。これによって玄菟郡はわずか三県の小郡になった。このように玄菟郡が縮小・撤退したのは敵対する高句麗族の抵抗があったためだと推測されている。高句麗はすでにこの頃、鴨緑江中流域や渾江流域に根拠地をもち、侮れない政治勢力として成長していたと見られる。現存最古の朝鮮の歴史書『三国史記』によれば、高句麗の建国は紀元前37年と記されている。一方の楽浪郡は二十五県を抱える巨大郡となり、400年間、朝鮮半島における中国政治の前線基地として機能することになる。

(3) 高句麗

紀元前75年に玄菟郡おうりよくこうが鴨緑江中流地域から撤退すると、鴨緑江の支流である渾江こんこうの流域そつほんの卒本そつほん（現在の中国遼寧省桓仁）の地に、はく貉族の高句麗が誕生する。朝鮮の歴史書『三国史記』によれば紀元前37年の出来事として伝えられている。始祖は朱蒙しゅもう（鄒牟そうむ）といい、同じ貉族の夫餘ぶよの王族の出身であると記録されている。高句麗はいくつかの部族から成っていたが、それらは奴ぬと呼ばれる邑落共同体ゆうらく（有力な五つを五族といい、涓奴部しゆぬぶ・絶奴部ぜつぬぶ・順奴部じゆんぬぶ・灌奴部かんぬぶ・桂婁部けいろぶの五つがあった）を中心とした部族連合国家であった。



中国では紀元8年に外戚の王莽おうもうが帝位を奪い、前漢を倒して「新」という王朝を建国した。しかし、王莽は周の政治を理想とした極端な復古主義政策を展開したので、社会の実情に合わず、農民や豪族の反乱が相次ぎ、わずか15年で滅亡した。新の滅亡後、やがて漢の一族である劉秀が漢（後漢）を復興すると、対外政策に変更が見られた。前漢から新にかけての武力制圧に代わって懐柔政策へと転換する。樂浪郡の組織も在地の豪族を主体とし、実質的な中国の郡県支配は遼東郡に移動した。このような後漢の政策のおかげで、一世紀の間は後漢と東方諸民族の間の対立は少なかった。しかし二世紀になると、高句麗・夫餘の両国は遼東平原獲得を狙って遼東郡と再び対立する。高句麗が鴨緑江流域の山間部から農耕に適した遼東郡への進出を目指すなら、夫餘も北方の松花江流域の寒冷地から温暖な遼河流域への進出を目論んでいた。両者は同じ土地を目指して領土を拡大しようとしていたために共同して遼東郡と戦うことができなかった。そこで遼東郡と高句麗と夫餘の三者による遼東平原争奪戦が繰り広げられることになる。

後漢は184年に勃発した農民の反乱の黄巾の乱をはじめ、五斗米道ごとうまいどうといった道教的教義に支えられた民衆の反乱などが相次ぎ分裂状態に陥る。そしてこれに乗じて地方の豪族も中央政府に対して反旗を翻す者も多くなった。遼東郡の支配も例外ではなかった。この頃、玄菟郡役人から出世し遼東太守になった者に公孫度こうそんたくがいる。彼は、西は烏丸うがんを討ち、東は高句麗を

攻めたて、190年には国家体制を整え中央政府から自立した。公孫氏の政権は、度から康・恭・淵へと受け継がれていく。204年、公孫康の時代になると、朝鮮半島南方の諸族を統制するために、楽浪郡の南部を割いて帯方郡を設置した。

高句麗では、197年に8代目の新大王(伯固)が薨ずると、皇子の拔奇と伊夷模の間で皇位継承をめぐり争いが起こった。この当時、高句麗の王位継承は部族会で決定していた。王位継承の選挙権を持つ有力五部族が王位継承の資格者を擁立し、支援部族の多い者が王位に就いた。この時、兄の拔奇を支持する部族は涓奴部のみで、他の四部族は弟の伊夷模を支持した。そこで拔奇は遼東郡の公孫康に救援を求めて逃げる。伊夷模は支持勢力に推されて現在の中国吉林省集安に新国を建国する。やがてこの新国が高句麗を名乗るようになる。

220年に後漢が魏によって滅ぼされると、中国は北の魏・南の呉・西の蜀の三国時代を迎える。呉の孫権(大帝)は遼東郡太守の公孫淵や高句麗の東川王と結び、東方から魏を牽制しようとする。237年、魏の曹叡(明帝)は毌丘儉を幽州刺史に任じ、遼東郡討伐を命じるが失敗する。翌238年、曹叡は毌丘儉に加え司馬懿も派遣し公孫淵を討ち滅ぼした。このとき魏は公孫淵を南方からも討つために、長らく放置していた楽浪郡・帯方郡の二郡を支配下に入れた。これによって魏は朝鮮南部の韓族や日本の邪馬台国と積極的に交易できるようになると同時に、東方諸民族との連携によって呉国を側面からにらむことが可能になったのである。

高句麗は、238年の魏の公孫淵討伐の際には援軍を出したが、魏と直接接することになったため、その後しばしば魏の領内に侵入し、魏を刺激した。そのため244年、魏は幽州刺史毌丘儉を派遣し、高句麗を攻撃した。高句麗の王都丸都城は陥落し、王の東川王は妻子を連れて脱出する。戦いは三年にも及び、高句麗は滅亡の危機に瀕するが、この試練をしのぎ、その後再興する。

(4)馬韓・辰韓・弁韓

朝鮮半島の北部で高句麗が統一国家を築いていた頃、半島の南部にはまだ統一国家は誕生しておらず、韓族による地域別の小国家群が存在するにすぎなかった。魏が楽浪郡・帯方郡を修復して、高句麗や扶餘を攻略するなど、東方政策を展開していく過程で、東方の諸種族に関する情報が収集されていった。これらの諸種族の情報は晋の陳寿によって『三国志』の『魏書』の中に遺されている。それによると、「韓は、帯方郡の南にあり、東西は海で、南側は倭と接しており、広さは四方四千里の広さを持ち、種族には馬韓、辰韓、弁韓の三つがある」と記されている。さらに馬韓については、「馬韓は半島の西にあり、その民は定住しており、穀物を植え、養蚕の技術があり、綿や布を作る。各邑落には長がおり、大きな邑落の長は臣智、小さな邑落の長は邑借といった。城郭はなく、海山に散在して暮らしている。国は全部で五十余国がある。そのうち大国には一万余戸、小国には数千戸、総計十余万戸あった。・・・」とある。辰韓については、「辰韓は、馬韓の東方にある。その地の古老達が代々言い伝えるところでは、『自分らは古の逃亡者の子孫で、秦の労役を逃れて韓の国に辿り着き、馬韓がその東部の土地を割いて与えてくれたのだ』と。居住地の周囲には城壁や柵がある。彼らの言葉は馬韓と異なり、国を邦といい、弓を弧といい、賊のことを寇といい、行酒(酒の回し飲み)を行觴といい、互いに徒と呼び合うなど、秦人の言葉と似たところがある。ただ単に近く燕や齊の言葉が伝わったという感じではない。彼らは楽浪郡の人のことを阿残と呼ぶ。東方の人々は自分達のことを阿と呼ぶが、楽浪の人々はもともと自分達の残余なので阿残と呼ぶのだという。今でも彼らの国のことを秦韓と呼ぶ者がいる。元来六か国であったが、徐々に分かれて十二国になった。」とある。そして弁辰(弁韓)については、「弁辰も十二国からなり、さらにいくつかの地方的な小さな村があつて、それぞれに統率者がいて、有力者は上から順に臣智、險側、樊濊、殺奚、邑借と呼ばれる。・・・辰韓と弁韓は雑居していて、合わせて二十四の小国家が存在しており、そのうち大きいものには四千～五千戸、小さいものには六百～七百戸、総計四万～五万戸あった。・・・」とある。このように、およそ3世紀の朝鮮半島の南には韓族の国々が馬韓・辰韓・弁韓合わせて八十近い小国家が存在していたと考えられる。

(5) 楽浪郡の滅亡

265年に魏が滅び、晋が成立すると、晋が楽浪・帯方両郡の支配権を引き継ぐ。前漢末頃の楽浪郡の規模はおよそ25県を擁し、63,000戸数あったが、この時、楽浪郡は僅か6県、3700戸、帯方郡も7県、4900戸にまで減少していた。さらに、晋が八王の乱などで衰退していくと、両郡を支配する力はもはや無くなっていた。そこで高句麗第15代の美川王は、313年楽浪郡を占拠、翌314年には帯方郡を攻略した。これは紀元前108年から続いた中国の朝鮮支配体制に終わりを告げるものであった。

楽浪郡と帯方郡の滅亡によって高句麗の領土拡張は容易になるように思えたが、そこに立ち上がったのが五胡十六国の混乱の中から台頭した鮮卑族の慕容氏である。慕容氏が319年に遼東を確保すると、高句麗は慕容氏と直接対峙することになった。慕容氏は337年に自立して燕国を建てると、342年、燕国王の慕容皝は五万の大軍でもって高句麗を攻撃した。高句麗の故国原王は単身東方に逃亡するが、慕容皝は容赦しなかった。丸都城を破壊した上、宮殿を焼き払い、五万人余りを掠めとり、王母や王后を人質にただけでなく、先王の美川王の王陵を暴いてその屍をも持ち帰った。ここに再び高句麗の王都は壊滅したのである。翌年、故国原王は弟を燕に入朝させ謝罪したので父美川王の屍を返してもらうことができたが、王母は返してもらうことはできなかった。355年、故国原王は人質と献上品を納付し、ようやく王母の帰国が許された。このとき燕王の慕容儁は高句麗王を冊封した。高句麗の王が中国の王朝から冊封を受けるのはこの時に始まる。これ以降朝鮮半島の諸国王が中国の王朝から冊封を受けるはじめとなった。この後、燕の勢力が弱まり、高句麗と燕との衝突はみられなくなる。

しかし、美川王時代に始まった高句麗の南進政策は半島南部の新興勢力の百済を刺激することになった。369年、高句麗故国原王は二万の軍隊を率いて百済を攻めるが、逆に百済の太子須に撃破される。その二年後の371年、故国原王は再び百済を攻撃するために大同江を渡るが、百済の伏兵に苦戦する。勢いに乗った百済軍は近肖古王自ら三万の兵を率いて高句麗の平壤城を攻め、高句麗の故国原王は流れ矢にあたりあえなく一命を落とす。故国原王の戦死の後、王位を継いだ小獸林王は国力の充実に力を入れ始めた。仏教を広め、大学を建て、儒教による教育を始め、律令を頒布した。次の故国壤王も厚く仏教を敬い、また宗廟を建てるなどして礼制を整えた。次に王位を継承して即位したのが、18歳の広開土王である。正式な諡号は「こくこうじょうこうかい ど きょうへいあんこうたいおう国岡上広開土境平安好太王」であるが、『三国史記』が「広開土王」と略して用いたことより、一般には「広開土王」がよく用いられている。日本ではよく「好太王」が用いられるが、「好」と「太」は王につける単なる美称なので、「好太王」より「広開土王」を用いたい。広く領土を開墾したのでこの名がついているが、実際、この王と次の長寿王の治世に高句麗は最盛期を迎える。

(6) 高句麗広開土王の碑

1880年、中国吉林省集安市で苔や蔓に覆われた石碑が発見された。それは広開土王の没後、西暦414年に息子の長寿王によって建立された『広開土王碑』であった。高さ約 6.3 m、幅約 1.4m～1.9m、重さ約 37トンの凝塊角礫岩の角柱状の石碑である。四面を通じて44行、1行当り原則41文字、文字の大きさは不揃いであるが、およそ12cm平方～14cm平方で、総数1775字が刻まれている。碑文は全三段から構成されている。第一段はいわば序論で、第一面の途中まであり、高句麗の始祖鄒牟王伝承と建碑の目的について書かれている。第二段は本論前編にあたり、第三面の途中まで続き、広開土王の武勲を年代記的に記してある。第三段は本論後編で、広開土王陵の守墓人烟戸三三〇戸の構成とその由来について記してある。第一段の始祖鄒牟王伝承は次のように述べられている。

【碑文 第一段（冒頭部分）】

〈惟昔始祖鄒牟王之創基也出自北夫餘天帝之子母河伯女郎剖卵降世生而有聖□□□□□命駕巡幸南下路由夫餘奄利大水王臨津言曰我是皇天之子母河伯女郎鄒牟王爲我連葭浮龜應聲即爲連葭浮龜然後造渡於沸流谷忽本西城山上而建都焉不樂世位天遣黃龍來下迎王王於忽本東罌履龍首昇天顧命世子儒留王以道興治大朱留王紹承基業逡至十七世孫國罌上廣開土境平安好太王……〉

注) 赤字は字画の一部が合致する碑字。□は積文できない碑字。

【書き下し文】

「^こ惟れ、昔、始祖^{すうむ}鄒牟王の創基せるなり。北夫餘自り出ず。天帝の子、母は河伯の女郎なり。卵を剖きて世に降り、生まれながらにして聖□有り。□□□□□駕を命じ、巡幸して南下し、路は夫餘の^{えんりだいすい}奄利大水に由る。王、津に臨みて、言ひて曰はく、『我は是れ皇天の子、母は河伯の女郎、鄒牟王なり。我が為に葭を連ね、龜を浮ばしめよ』と。^{こえ}聲に應じ、即ち為に葭を連ね、龜を浮かべ、然る後に造渡せしむ。沸流谷の忽本の西に於て、山上に城きて都を建つ。世位を樂まず。天、黃龍を遣わし、来り下りて王を迎へしむ。王、忽本の東罌に於いて、龍首を履みて天に昇る。世子の儒留王に顧命し、道を以て興治せしむ。大朱留王、基業を紹承し、十七世孫の國罌上廣開土境平安好太王に至るに逡ぶ。……」

【和訳】

「その昔、始祖、鄒牟王が高句麗を建国された。出自は北扶餘であり、(王は)北扶餘の天帝の子で、母は河の神の娘である。(王は)卵から誕生され、天からこの世に降臨された。生来、聖□を備えられていた。□□□□□を命じ、(王は扶餘を出て)南へ進まれた。進路は扶餘の奄利大水に従った。王は津を眼前にして言われた。『我こそは扶餘の天帝の子で、母は河の神の娘の、鄒牟王である。我が為に葦を連ね、龜を浮かべて(渡らせよ。)]』すると、その声に応じて、葦が浮き出て龜が現れて鄒牟王を渡らせた。(王は)沸流谷の忽本の西側の山頂に都を造られた。(しかし、やがて王は)この世の王位を樂しめなくなった。そこで天は黃龍を下して王を迎えさせた。王は忽本の東の岡から龍に乗り、龍の首に跨って天上に昇られた。(王は)王位を継ぐ世子の儒留王に命じ、道に従って政を盛んに行なわせた。(次の)大朱留王がこれを受け継ぎ、十七世孫に当たる国岡上廣開土境平安好太王に至ったのである。…」

第二段は広開土王が領土を拡大した業績を記した部分であるが、倭との戦闘記事があるために、これまで度々話題になっている。特に、諸説が飛び交っているのが「辛卯年」条の箇所である。「百殘新羅舊是屬民由来朝貢」の箇所については、大方意見は一致しており、普通、「百濟と新羅は元來高句麗の屬民であつて、以前から朝貢してきた。」と訳される。問題はその後である。□印は風化のため判読出来ない文字である。「海」も風化が進んでいるが、こちらは「海」と読めるという人と読めないという人とに分かれる。百殘というのは百濟のことで、高句麗の百濟に対する蔑称である。そして、この百濟の後の二つの□□に入れる碑字として、「加羅」、「倭寇」、「連侵」、「招倭」など様々な説がある。

【碑文 第二段（冒頭部分）】

〈永樂五年歲在乙未王以稗麗不□□人躬率往討過富山負山至鹽水上破其三部落六七百營牛馬羣羊不可稱數於是旋駕因過襄平道東來□城力城北豊五備海遊觀土境田獵而還百殘新羅舊是屬民由来朝貢而倭以辛卯年来渡海破百殘□□新羅以爲臣民以六年丙申王躬率□軍討伐殘國・・・〉

注) 赤字は字画の一部が合致する碑字。□は釈文できない碑字。

【書き下し文】

「永樂五年、歳は乙未に在り。王、稗麗の□人を□せざりしを以て、躬ら率ゐて往討す。富山・負山を過ぎ、鹽水の上に至り、其の三部落、六・七百營を破る。牛馬・羣羊は、稱げて數ふべからず。是に於て駕を旋し、因りて襄平を過ぎ、東來・□城・力城・北豊・五備海を道、土境を遊觀し、田獵して還る。百濟・新羅は、舊是れ屬民にして、由来朝貢せり。而るに倭、辛卯の年より以來、海を渡りて百濟を破り、新羅を□□し、以て臣民を為せり。以て、六年丙申、王、躬ら□軍を率ゐ、殘國を討伐す。……」

【和訳】

「永樂五年(395年)、乙未の年、王は稗麗が□人を□しなかったので、自ら軍を指揮して、親征して討伐した。富山、負山を過ぎ、塩水流域に達し、そこにある三つの部落の六、七百の營(包のようなもの)を打ち破った。捕獲した牛馬や羊は多すぎて数えきれない。(王は)そこで隊の方向を転じ、襄平を過ぎ、東來、□城、力城、北豊や五つの備(要害)の海を経て、領土を遊觀し、狩猟しながら帰還した。百濟と新羅は元來高句麗王の屬民であつて、以前から(高句麗王に)朝貢していたのである。ところが、倭が、辛卯年(391年)よりこの方、海を渡って百濟を破り、新羅を□□して、臣民にしてしまった。よって、永樂六年(396年)、丙申の年、王は自ら□軍を率い、親征して百濟國を討伐した。…」

第二段は広開土王が領土を拡大した業績が記されてはいるが、広開土王の武勲をたたえることを目的としたものではない。第三段に記されている守墓人の3分の2が、この第二段に出てくる王の討伐地域から徴発されるのである。つまり、第二段は第三段で現れる守墓人の徴発地域の由来として書かれたのである。結局、この広開土王碑の建立の目的は、第三段の守墓役制度に関する法令の布告にあると言われている。

さて、第二段に述べられている広開土王の武勲をここに整理すると次のようになる。

西暦	
391	倭が百済、新羅に侵攻した。
395	王、躬率して契丹族の稗麗(沃沮地方)を討伐した。
396	王、躬率して百済を討伐した。
398	王、教遣して肅慎族を討伐した。
399	百済が高句麗との約束を破り、倭と同盟を結び、倭が新羅の国境まで攻めた。
400	王、教遣して五万の大軍を新羅に送り、新羅を救援し、倭人と安羅人を撃退した。
404	倭の水軍が帯方郡(現在の黄海道地方)まで侵入したので、王、躬率して倭を討伐した。
407	王、教遣して五万の大軍を□□□□□に送り、多くの戦利品を得た。
410	王、躬率して東扶餘を討伐した。

このように、広開土王は北方のしゅくしん肅慎・東扶餘と南方の百済・倭などを討って、朝鮮半島と中国の東北三省をほぼ隷属させたということになる。碑文には書かれていないが、高句麗は遼東平原をも征服していた。広開土王は治世二十二年間で、これだけの領土を獲得したのである。

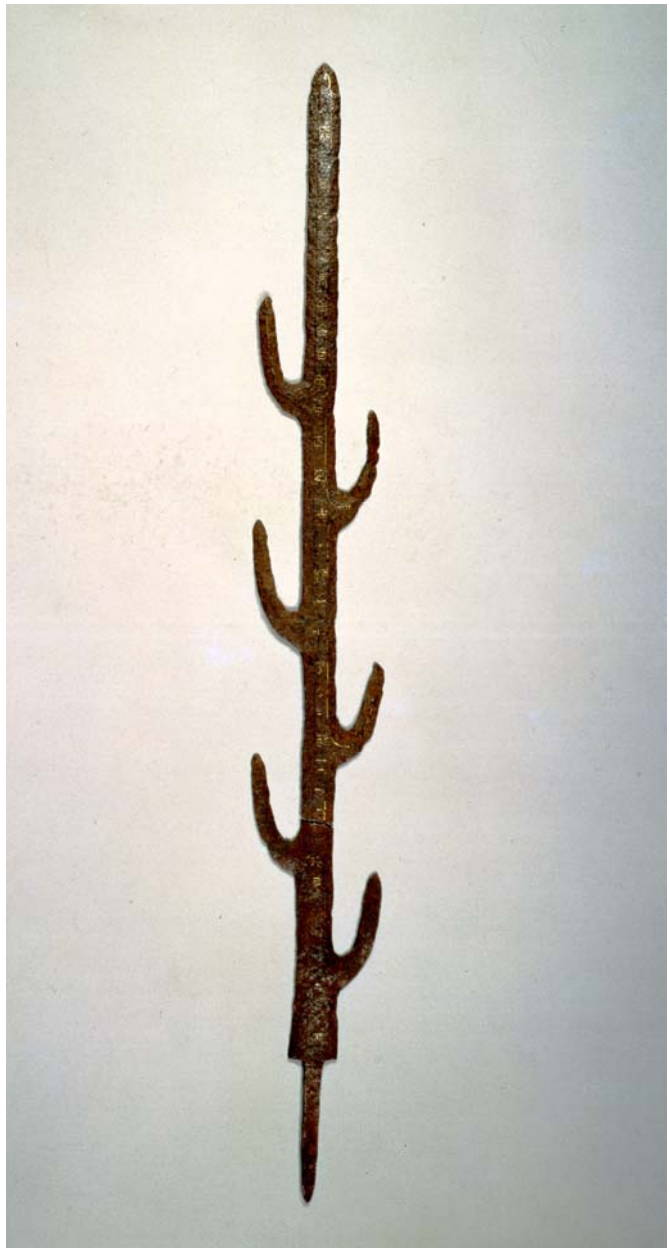
ところで、王の武勲の記事の書き方には二つのタイプが見てとれる。一つは「王躬率」タイプ(王自らが軍を率いて出征するタイプ)であり、もう一つは「教遣」タイプ(軍隊だけを派遣するタイプ)である。そして、「王躬率」タイプの場合には、その記述の前に、王自ら出征するに至った理由、或いは、王の親征によって困難な事態が打開される状況が前置きされている。例の「辛卯年」条の箇所も、「王躬率」タイプで書かれている。つまり、「高句麗の属民であった百済が高句麗との約束を破り、倭と同盟を結び、さらに倭が新羅の国境まで攻めるといふ非常事態において、王自ら親征して倭を成敗するという偉業を成し遂げた」という構成になっている。敵(倭)が強力なほど広開土王の偉業ぶりを知らしめることができるということであろう。

第三段では広開土王陵の守墓人330戸と、守墓人の売買禁止やその罰則について記載されている。第二段がよく注目されてきているが、実は建碑の目的は第三段の守墓役制度に関する法令の布告にあると言われている。第二段に王の武勲が書かれている理由は、王が韓・濊から六四城を奪取したことを述べるためのものである。守墓人330戸の内220戸が、王の遺言により、この征服地の中から徴発されているからである。この頃の高句麗では王の権力が強くなりつつあるが、依然として五族によって政治は動いていた。それまで高句麗王陵の烟戸は高句麗本来の五族を中心とする住民が担っていた。王の親征とその被支配地域の住民を烟戸にしたことを記した石碑は、王制成立の期待を込めたシンボルだったのではないか。

(7) 百濟

百濟は馬韓の伯濟国が周囲の小国を統合して成長した国と考えられている。伯濟国というのは現在のソウルを流れる漢江より南側一帯にあった。王都は慰礼城(現在の京畿道河南市)に置かれた。伯濟国から百濟への成長過程を記した史料はないが、四世紀中頃までには百濟は国家として出来上がっていたと考えられる。百濟の興起は、四世紀中頃の近肖古王(在位346～375)とその次の近仇首王(在位375～384)の治世である。北の強国高句麗に対して百濟は連携してくれる勢力を求めなければならなかった。そこで百濟は南へ進み、安羅、卓淳、金官などの東南沿岸部の加耶諸国と親交を結び、さらにそれらの国を介して、倭とも友好関係を築いたと考えられる。

このときの倭と百濟の友好関係の証の品ではないかと言われているのが、奈良県天理市の石上神宮に伝来する「七支刀」である。長さ約75cmの鉄製の両刃剣で、剣身から左右に互い違いに枝刃が6つ出て、中心の1つと合わせて計7つの枝になる。刀身の表側に34字、裏側に27字の金象嵌の文字が見られるが、判読不能な文字が幾つかあって、学者によって解釈の仕方に諸説がある。ところで、『日本書紀』の神功皇后五十二年九月条に、「久氏等、千熊長彦に従いて詣り。即ち七支刀一口、七子鏡一面、及び種々の重宝を献る」という記載がある。石上神宮に伝来する七支刀は、その銘文から推して、日本書紀の中に出てくる「七支刀」であると考えられている。『日本書紀』の「神宮皇后五十二年」は西暦372年相当の可能性があり、七支刀の「泰和四年」は西暦369年に相当する。年代的には同時代である。



写真提供: 石上神宮

【七支刀金象嵌字】

表側 〈秦□四年□□月十六日丙午正陽造百練^釵七支刀□辟百兵供侯王□□□□作〉

裏側 〈先世以来未有此刀百濟□世□奇生聖音故為倭王旨造□□□世〉

注) 赤字は判読しづらく諸解釈のある字。□は釈文できない碑字。

【和訳】

「秦和四年六月十一日丙午の日の正陽、鍛錬した鉄でこの七支刀を造りました。敵兵を悉く打ち破る靈刀を倭王に贈ります。○○○○作」
「百濟王と世子の奇生聖音(後の貴須王)は、倭王のために昔から見たことのないこの刀を造りました。願はくば、後世まで伝えられんことを」

前述(p.11)したように、七支刀が製造された369年、百濟の太子、須^{しゆ}(後の近仇首^{きんきゆうしゆ})は攻めてきた高句麗故国原王を撃破する。さらに二年後の371年、太子は父の近肖古王^{きんしょうこ}と共に高句麗の平壤城を攻めて、高句麗故国原王を討った。七支刀はまさにこうした時期の贈物である。従来は、「百濟王世子より倭王に献上された」とする説が通説であったが、最近では、百濟が倭と友好的な軍事同盟を結んだ記念として「百濟王世子より倭王に上下関係なく贈られた」とするのが有力となっている。

「百濟」という国名が初めて中国の文献に登場するのは、唐の時代に書かれた『晋書』の中である。その帝紀咸安二年(372年)正月の条で、百濟が東晋に朝貢している記述がある。そして同年六月には東晋は使者を送り、百濟王余句(近肖古王)に鎮東將軍領楽浪太守の号を授けている。いわゆる冊封である。近肖古王が東晋から冊封を受けられたのには、369年～371年にかけての高句麗との戦いに勝ったことが大きい。近肖古王はこの名声を携えて東晋に冊封を要請したのであろう。そして近肖古王は東晋から冊封を受け、強国高句麗を破った国として東アジアの国際社会に登場することができたのである。

内政面では、371年、漢山に王都を築いている。最初の王都慰礼城からわずか約6.5kmしか離れていないので、遷都というよりは新興国の王都に相応しく、最初の慰礼城を拡張、整備したと考えられる。また、近肖古王^{きんしょうこ}(在位346～375)の代に、博士高興によって文字がもたらされ、記録を残すことができるようになった。文字の使用によって文化の発展が加速したことはもちろんのこと、外交上、極めて大きな出来事であったと言える。さらに、384年には、東晋から西域の僧侶摩羅難陀^{マラーナンダ}によって仏教が伝えられ、王室で信奉されるようになった。これが百濟仏教のはじめと言われている。

新興国の百濟にとって、北の高句麗の存在は脅威であった。百濟と高句麗の間では、幾度となく戦闘が続いていたが、391年に、高句麗に広開土王が即位すると、百濟は存亡の危機に面する。『広開土王碑』によると、396年、広開土王自ら大軍を率い、百濟の漢山城を攻めてきた。百濟は58の城、700の村を奪われ、王弟と大臣10人が連行された。百濟の阿華王^{あしん}(在位392～405)は、高句麗に降伏し、服属を誓わされたという。しかし、百濟もすぐに対策を

講じた。397年、阿華王は倭に太子の腆支てんしを人質として送り、倭との軍事同盟を強化した。これを受けて、『広開土王碑』に見られるように、404年、倭の水軍が百済を支援するために帯方郡(現在の黄海道地方)まで侵入したのである。

5世紀の中国は南北朝時代で、北朝(北魏)と南朝(宋や齊)が対立する時代である。高句麗はこの対立を上手く利用し、両朝に使者を送り、両朝から冊封を受けていた。これに対して、百済は南朝のみに使者を送り、冊封を受けていた。427年に高句麗が王都を南の平壤に遷都し、本格的な南進政策に乗り出すと、百済は今までにない危機感を抱くことになる。そこで百済は、高句麗の従属から抜け出そうとする新羅と同盟を結ぶ。そして、中国の南朝に使節を送り、高句麗に対抗した。472年、百済の蓋鹵王がいろおうは高句麗の悪逆無道な振る舞いを訴え、その討伐を請うたが、それまで百済が北魏に朝貢しなかったことを理由に退けられた。果たして三年後の475年、高句麗は長寿王自ら三万の兵を率いて百済の王都漢山城を攻撃する。城は七日七夜の間耐え抜くが、ついに蓋鹵王は捕らえられ、殺される。このようにして、百済はここで一旦滅びるが、後に、南に落ち延びた太子の文周が百済を再興することになる。

漢山城陥落から僅か一か月後、南に落ち延びた文周は、錦江上流の熊津城きんこう ゆうしんで即位し、百済を再興するが、漢山城での基盤を失い、一からの出発だったので、文周王(在位475~477)、三斤王さんきんおう(在位477~479)の治世は、貴族の勢力争いが度々起こり、政局が安定しなかった。東城王とうじょうおう(在位479~501)が即位して、ようやく政局が安定し、王権を強化し、官僚制国家へと歩み始めたと言える。東城王は国内基盤を整えながら、外交においても積極的な政策をとっていく。490年と495年には、南齊に対して、現在の全羅道地域の領有権の承認を得る請求をしている。また493年には、新羅と婚姻関係を結び、連携して高句麗に対抗した。しかし、王権伸長策を急ぎ過ぎたため、新興貴族のべくか苜加に殺される。

東城王の皇子斯摩が501年に即位して武寧王ぶねいおうになると、朝鮮半島南部への領土獲得はさらに加速した。512年頃には、現在の全羅南北道から慶尚南道にかけての地域を統治下に入れたと思われる。中国に対しては、南朝の梁に、512年と521年の二度に渡り朝貢をしているが、二度目の521年の際には、新羅の使者をも伴っており、百済の使者は梁に対し、新羅も加耶諸国も百済の従属国であると伝え、その大国ぶりを顕示した。日本に対しては、513年以降、度々日本の要請に応じて、易経、詩経、書経、春秋、礼記の五経に精通している、いわゆる五経博士を派遣し、日本に儒教をもたらすなど文化の発展に貢献した。さらに、次の聖王(在位523~554)の時には、仏教が百済から日本に伝えられた。聖王は、生前は「明穠めいじょう」、没後に「聖王せいおう」というが、日本書紀では「聖明王せいめいおう」と記している。そのため日本では「聖明王」の名で知られている。

538年、聖王は錦江を25km南下した泗泚(忠清南道扶餘)に遷都した。王宮の背後に山城を築き、周囲には城壁をめぐらした王都である。王都を整えた聖王は、加耶地域を支配下に入れようとするが、上手くいかなかった。そこで、551年に、新羅と連合して高句麗を攻撃し、漢山城を奪回するが、翌年、新羅によって掠奪されてしまう。これに対して、554年、聖王の太子余昌(後の威徳王)の軍が函山城の戦いで新羅軍を打ち負かし、新羅国内にまで進撃するが、逆に新羅軍の中で孤立してしまふ。聖王はこれを救出しようとして伏兵に殺されてしまふ。百済はこの後、新興の新羅によって660年に滅ぼされてしまふ。

(8) 新羅

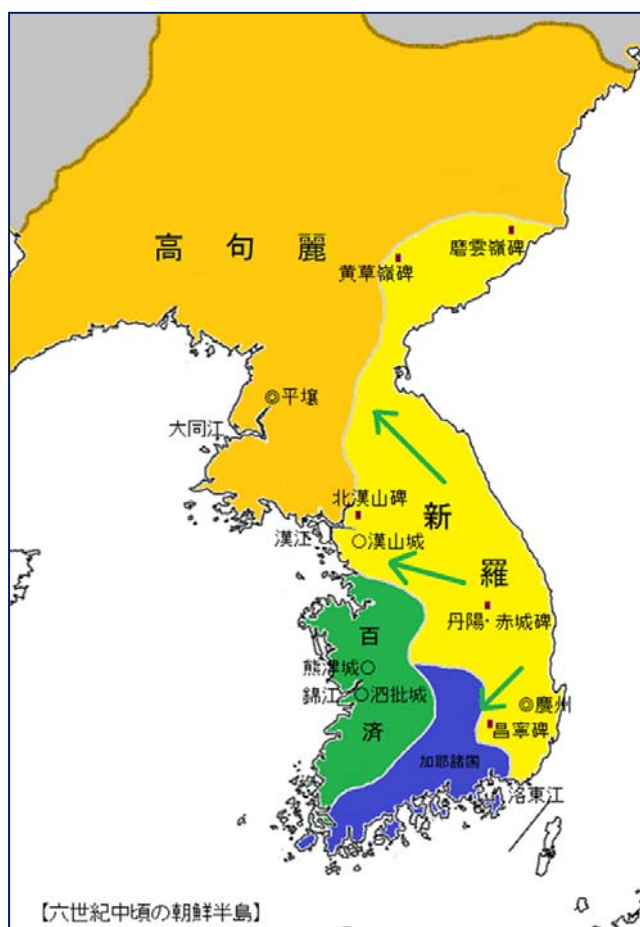
新羅は辰韓の斯盧国が周囲の小国を統合して成長した国と考えられている。斯盧国というのは半島の東南部、現在の慶尚北道慶州市にあった。一然(1206～1289)が編纂した『三国遺事』には、建国の神話について次のように記されている。

【『三国遺事』大意】

辰韓の地に昔六つの村があった。閼川の楊山村、突山の高墟村、觜山の珍支村、茂山の大樹村、金山の加利村、明活山の高耶村の六村である。これら六村の祖先たちは皆天から降りてきたようである。前漢の地節(漢の宣帝の年号)元年(紀元前六九年)三月、六村の村長が閼川の岸の畔に集まって、民を治める徳のある君主を探そうという相談をしていたところ、楊山の麓の池の辺りで雷光のような光が走った。すると、そこに一頭の白馬が跪いて、礼拝するような姿勢が見えた。六村の村長たちがその場所に行ってみると、一つの紫色の卵が落ちており、白馬は村長たちが来ると天に昇って行った。卵を割ってみると、中から男の子が出て来た。驚きながらも不思議に思って、その男の子を東泉寺に連れて帰り、湯浴みをさせると、全身が光輝いた。鳥や獣たちが集まってきて、天地が揺れ動き、月と日がことさら光輝いたので、その子を赫居世(世の中を光照らすという意味)と名付けた。人々は喜び、次は徳のある女君を探して配偶を決めなければならないと思っていると、同じ日、沙梁里の閼英井のそばに、鶏竜が現れて女の子を産んだ。容姿は殊更美しかったが、口元が鶏の嘴のようであった。月城の北川に連れて帰り、湯浴みをさせると、その嘴はとれた。南山の西の麓に宮殿を造り、二人の聖児を住ませた。男の子は卵から生まれ、その卵が瓢のような形をしていたので、(この地では瓢のことを朴というため)、男の子の姓を朴とした。女の子の姓は閼英とした。二人が十三歳になると、前漢の五鳳(漢の宣帝の年号)元年(紀元前五七年)、男の子は王となり、女の子は后となって、国号を徐羅伐、または徐伐といい、あるいは新羅または斯盧ともいった。后が鶏井から生まれたために、鶏林国ともいう。後世になってついに新羅と国号を確定した。赫居世が国を治めること六十一年目に、王は天に昇ったが、その後七日経って、遺体が散って地に落ちてきた。后も亡くなり。国の人と一緒に葬ろうとすると、大蛇が邪魔をしに現れた。そこで、五体を別々に葬り、これを五陵と名付けた。曇巖寺の北陵がそれである。太子の南解王が王位を継いだ。

四世紀初め、高句麗が楽浪郡・帶方郡の二郡を滅ぼし、半島中部にまで勢力を拡大してくると、これに対し、斯盧国は辰韓勢力を統合していった。やがて第十七代王、奈勿王(在位356～402)の治世になると、洛東江流域まで領土を拡大し、国家としての体制が整っていく。「新羅」という国名が中国の歴史書に登場するのはこの頃のことで、377年、新羅は高句麗に伴われて前秦に朝貢している。以来、新羅は高句麗に従属的な関係を維持していきながら、一方で、半島南部の加耶諸国からの侵略に苦しめられた。当時、新羅は高句麗と加耶諸国に何度も人質を出している。新羅が高句麗に対して反抗に転じるのは5世紀中頃である。先ず、433年に百済と和を結び、455年に高句麗が百済に侵入すると、百済に対して救援軍を送るなどして、百済と連携して高句麗に対抗するようになる。五世紀末、新羅は慶州盆地に王城を築き、周辺には、六部(建国の神話に見られる六つの村落を基盤とした新羅の六つの貴族集団)が居住した。領土が慶州盆地の外側にも拡大していくにつれて、盆地内が王京、その外側が地方というように区別されるようになる。

500年に智証麻立干(在位500～514)が即位すると、503年に、国号を斯盧から新羅に、王号を麻立干から国王に変えたと伝えられているが、麻立干の王号は次の法興王の代まで使用されており、この時期が過渡期であると思われる。(麻立干という王号は、国政を決定する貴族会議、これを和尓(わはく)というが、その会議の司会者に過ぎなかった。)智証麻立干の治世には、地方整備が進み、地方の長官に命じて農業を奨励し生産力は向上した。次の法興王(在位514～540)の治世には、国政の整備は一段と加速した。前王に引き続き、生産基盤を整え、軍事を司る兵部を設置し、統治機構を整備した。521年には百済の使者に伴って梁に朝貢もしている。また新羅では5世紀初めに既に仏教は伝わっていたが、527年、反対する貴族たちをおさえ、仏教を正式に認めることになった。さらに531年には、上大等(じょうたい)という最高官職(貴族会議の議長職)を置いた。当時の新羅を支えたのは「大等」という貴族のエリート集団であり、上大等は貴族を代表して王を掣肘する権力を持っていた。



新羅が飛躍的に領土を拡大したのは、真興王(在位540～576)の治世である。551年には、高句麗の10郡を奪い、552年には、百済が高句麗から取り戻した漢山城一帯を掠奪し、翌年、そこに新州を置いた。その結果、新羅は半島の東南部から高句麗と百済の間に割って入り、西海岸にまで領土を広げることができた。一方で、562年には大加耶を滅ぼし、洛東江下流域の加耶諸国をも手に入れた。

このような真興王の領土拡大の痕跡は王の建てた碑によって証明される。545年前後に建立された「丹陽・赤城碑」は高句麗侵攻の突破口となった赤城地方にある。561年に建立した「昌寧碑」には加耶諸国経略のために働いた軍官の歴名が記されている。568年には、北辺に「摩雲嶺碑」、「黄草嶺碑」の二つの碑を、漢山城の近くに「北漢山碑」を建立している。

新羅が領土拡大していく中で、その軍事力の養成機関として活躍したのが「花郎集団」である。「花郎」と称するリーダを中心に、十五、六歳の貴族の子弟を複数の集団に分けて「花郎集団」を組織し、互いに、道義・歌舞・武技などを磨かせ、心身を鍛錬した。そして、この花郎の中から国家有為の人材が育成された。統一戦争で活躍した金庾信もその一人である。

法興王(在位514～540)の治世に仏教が公認されると、真興王の治世には、興輪寺、永興寺、皇龍寺、祇園寺、實際寺などが次々と建立された。これらの寺院の中で最も重要なものは553年に建立された皇龍寺である。皇龍寺は本来、宮殿として計画されたものであったが、途中で寺院に変更された寺で、最初は王室の私的な寺院として出発するが、のちには新羅仏教の中心寺院として機能するようになる。

(9) 加耶諸国

馬韓の伯濟国を中心にして百済が生まれ、辰韓の斯盧国を中心に新羅が生まれるが、弁韓からは大きく成長する国が現れなかった。加耶諸国というのは弁韓地方の諸小国群を指して言う。その呼び名に関しては、単に「加耶」・「加羅」・「任那」と呼ばれることも多い。諸小国が連盟を組んで大国に対抗することはあったが、最後まで一つにまとまることはなく、その時々々の連盟の仕方「六加耶」・「浦上八国」・「任那十国」などという呼び方で文献に残っている。加耶諸国がどのような地理的範囲を指すのかははっきりしていないが、半島東南部の洛東江から内陸に入り、小白山脈を西に越え、蟾津江下流に至るまでの範囲で、慶尚南道を中心に慶尚北道にまで及ぶ範囲と考えられているようだ。

「加耶諸国」が文献に残っている最も古い史料は、高句麗の『広開土王碑』である。その中の永樂十年の条で、「永樂十年(西暦400年)、庚子の年、王が教遣して五万の大軍を新羅に送り、新羅を救援した。男居城から新羅城に至るまで、倭は一帯に満ちていたが、高句麗の官軍がまさに到着しようとした時、倭賊は退却した。さらに口背して急迫し、任那加羅の従拔城に至るや、従拔城はたちまちに帰服した。・・・」というように、「任那加羅」という形で現れる。

「任那加羅」とは「任那」と「加羅」ではなく、「任那という加羅」である。この「任那加羅」というのは、「金官加羅」、或いは「金官」ともいい、加耶諸国を代表する小国である。

「金官」は、3世紀の弁韓の「狗邪国」の後進であり、地理的には現在の慶尚南道金海市にあたる。例の『魏志』倭人伝の中で、帯方郡から邪馬台国に行く行程で「狗邪国」は出てくる。帯方郡から西海岸、南海岸を航行し、半島の東南部の「狗邪国」にまで至り、初めて大海を渡ると記されている。「金官」があった地域は古代から鉄の産出地であり、同時に、海上交易の盛んな地域であった。このような環境で「金官」は発達し、四世紀には洛東江下流域を中心に盟主的地位を確立していた。ところが、五世紀になると金官国は新興勢力国家の新羅に苦しめられ始め、五世紀後半には、その勢力は洛東江内陸部の「大加耶」に移行していく。

「大加耶」は、3世紀の弁韓の「半路国」（「伴跛国」ともいう）の後進であり、現在の慶尚北道高靈郡を中心とする地域にあった。「大加耶」は小白山脈山麓の「己汶」・「滯沙」などの諸国までを含む地域の盟主的地位を確立していた。479年には、中国南朝の齊へ朝貢し、冊封まで受けている。『南齊書』東夷伝に、「加羅国王荷知の使者が来献し、輔国將軍加羅国王に任じられた」とある。しかし、513年に、百済が「己汶」、「滯沙」を支配下に組み入れると、「大加耶」は百済に対抗するため新羅に婚姻関係をもちかけ同盟関係を結ぶ。しかし、新羅にも加耶侵略の下心があったため、婚姻関係は数年で破綻することになる。524年になると、新羅が洛東江を越えた加耶南部の「金官」や「卓淳」などへ本格的に攻撃し始め、529年には金官は壊滅的打撃を受け、ついに、532年、金官は王及び王族の新羅への投降という形で滅亡した。その後、金官に続いて「喙己吞」や「卓淳」なども新羅に征服された。

「金官」、「喙己吞」、「卓淳」と南部の加耶諸国が次々に新羅の手に落ちたことを知った「安羅」は、百済に救援を求めた。百済はすでに「滯沙」を支配下に入れ、加耶諸国南部にまで勢力をのばしていたので、安羅はその百済軍に、安羅の警護を求めたのである。これによって、「卓淳」まで進出



していた新羅と、「安羅」にまで進駐してきた百済が、加耶諸国において対峙する形となった。538年、百済は熊津から泗泚に遷都すると、郡将・城主を設置して地方支配に力を入れた。同時に、新しく支配下に組み入れた「己汶」・「滞沙」、さらに「安羅」に至る地域にも郡令・城主を設置して、「安羅」地域をも百済領に組み入れようとした。百済と友好関係を保ってきた安羅にとって、この百済のやりかたは見逃せないものであった。そのため安羅は新羅より方向転換することになった。

541年、百済の聖王は、新羅と和睦を結んだ上で、同年及び544年に、主要な加耶諸国の首長を百済に集めて、「金官」「卓淳」「喙己吞」の三国の復興について対策会議を主催している。しかし、百済がすでに滅んだ加耶諸国の復興を本気で願ったわけではない。まだ新羅に落ちていない「安羅」などの残存加耶勢力が新羅に内応することを止めるのが目的だったと思われる。結局、会議は百済にとって何ら成果なく終わり、安羅はまもなく新羅に投降することになる。このような加耶諸国をめぐる新羅と百済の駆け引きは、554年の函山城の戦いで新羅が百済に勝利することによって、急速に新羅優勢に動き出した。勢いに乗った新羅が、562年に大加耶を滅ぼすと、大加耶に連盟していた諸国も次々に新羅に投降し、加耶諸国はすべて新羅領となった。時代は、朝鮮半島統一にむけて高句麗、百済、新羅の三国がしのぎを削る時代に突入する。

<< 関連語句 >>

■八王の乱…西晋(265～316)を建国した武帝の子の恵帝(在位290～306)の時、皇后の賈氏とその一族が、汝南王亮を召して政治を輔けさせたが、その専権を嫌い、帝の弟で、楚王瑋と計って汝南王亮を殺すが、楚王瑋も殺される。これに対して、汝南王の弟、趙王倫が兵を率いて宮中に入り、賈皇后を殺し、恵帝を廃して、自ら帝位に即いた。そこで、一族の齊王冏・長沙王乂・成都王穎・河間王顥らが趙王を殺し、恵帝を復位させた。しかし功を立てた諸王の間に内紛が起り、齊王冏がまず殺される。長沙王が殺され、成都王と河間王が相次いで殺され、306年、最後にひとり残った東海王越が懷帝を擁立して実権を握った。これら一連を八王の乱という。

■五胡十六国…北方系の匈奴・羯・鮮卑とチベット系の氐・羌の五つの民族を五胡という。五胡の諸民族は、その強大な軍事力で政権をうちたてるが、長続きはしなかった。およそ130年間に20に達する諸国が興亡を繰り返したが、そのうちの16の国に基づいてこの時代を五胡十六国時代という。その16の国とは、匈奴の建てた「前趙」、「夏」、「北涼」、羯の建てた「後趙」、漢人の建てた「前涼」、「西涼」、「北燕」、鮮卑の建てた「前燕」、「後燕」、「南燕」、「西秦」、「南涼」、氐の建てた「成漢」、「前秦」、「後涼」、羌の建てた「後秦」の十六である。

■九品官人法…220年に魏が成立したときに陳羣によって立案施行された官僚登用制度である。地方の郡ごとに「中正」と呼ばれる官を置き、中正は郡内の官吏志願者の才能や人徳を調査し、最高の一品から最低の九品までで等級をつけ中央政府に送る。これを「郷品」という。一方、中央政府の官職も一品から九品に等級付けをしておく。これを「官品」という。中央政府は中正から送られてきた郷品に応じて官吏志願者をそれに相応しい官職に任命した。このとき、官品は郷品の四等下と決まっていた。つまり、郷品二品を与えられた志願者は官品六品の役職に就いた。以後の官歴で二品の官職まで昇進できた。九品官人法制度の趣旨は、家柄に関わらず、個人の才能や人徳に応じて、官位に登用することであった。しかし、中正の職に任じられる者が有力貴族の子弟を優遇するようになると、次第に九品官人法は、門閥第一、家柄中心に郷品を与えるようになり、貴族階層を固定させる道具となった。このため、当時、「上品に寒門なく、下品に勢族なし」(高い品等には低い家柄の者はなく、低い品等には高い家柄の者はいない)と言われた。

■ 禅譲…中国では、王朝が交代することを、天命が革まる、すなわち「革命」と称される。革命の方法には二つの方式があり、一つは武力で前王朝を滅ぼすことで、「放伐」という。もう一つは前王朝の天子が平和的に一族以外の有徳者に位を譲ることで、「禅譲」という。しかし、禅譲も実質上は放伐や篡奪と少しも変わらないことがほとんどである。

■ 府兵制…西魏で始まった兵農一致の兵制。東魏の高歓は充実した強力な兵力を持っていたのに対し、西魏の宇文泰は微力な兵力しか持っていなかった。西魏が東魏と互角に戦うためには、農民を効率の高い兵士として育てて組織するしかなかった。これを府兵制という。府兵制はその後、北周、隋、唐で引き継がれる。農民は、兵役期間中は租庸調を免除されるが、武器や衣服は自弁であり、農民にとっては重い負担になった。

■ 均田制…五胡十六国時代の長い戦乱の後、耕地は荒廃し、農民たちは流浪の民となっていた。そこで、北魏の孝文帝は流浪している農民を土地の耕作に戻すために、無主の土地を年齢や性別に応じて農民に対して給田し、土地の耕作権を認め、税を納めさせた。これを均田制という。その結果、皇帝の直轄地を拡大するとともに税収を増大し、豪族の大土地所有を抑制することができた。その一方で、豪族の反感を反らすために、豪族の所有する奴婢や耕牛にも給田を行った。

■ 尚古思想…儒家の経典に描かれた夏、殷、周等の古代の文物・制度を模範とする中国の思想。

■ 黄巾の乱…後漢時代の184年に、太平道という宗教結社を始めた張角が指導した農民の反乱。黄色の布を頭に巻いたことから「黄巾の賊」と呼ばれた。後漢衰退の大きな要因になった。

■ 五斗米道…後漢末の2世紀後半に、帳陵が蜀で始めた宗教結社。天師道ともいう。祈禱によって病気を治療をし、謝礼として五斗(約9リットル)の米を要求したのでこの名前がついている。孫の張魯によって教団として確立され、四川を中心に広まった。

■ 仏教の公伝…百済の聖明王が欽明天皇の時に、仏像・経論などを伝えたとされているが、その年代については、『上宮聖徳法王帝説』や『元興寺縁起』の538年(戊午年)説と『日本書紀』の552年(壬申年)説がある。538年説の方が有力とされている。

<<< 参考図書 >>>

- 『中学社会 歴史』(平成24年発行 教育出版)
- 『中学総合的研究 社会』(改訂版 平成21年発行 旺文社)
- 『中学社会 自由自在』(改訂第2刷版 平成25年発行 受験研究社)
- 『中学歴史の発展的学習』藤井譲治編著(2007年発行 文英堂)
- 『改訂版 詳説世界史研究』木下康彦・木村靖二・吉田寅編(平成20年発行 山川出版社)
- 『改訂版 詳説日本史研究』佐藤信・五味文彦・高埜利彦・鳥海靖編(平成20年発行 山川出版社)
- 『改訂版 世界史⑩用語集』全国歴史教育研究協議会編(平成20年発行 山川出版社)
- 『改訂版 日本史⑩用語集』全国歴史教育研究協議会編(平成21年発行 山川出版社)
- 『「なぜ？」がわかる 世界史 前近代』浅野典夫著(2012年発行 学研マーケティング)
- 『青木世界史B 講義の実況中継①』青木裕司著(2005年改訂新版 榊語学春秋社)
- 『倭国のなりたち 日本古代の歴史1』木下正史著(2013年発行 吉川弘文館)
- 『東アジアにおける国家の形成 日本史講座第1巻』歴史学研究会・日本史研究会編(2010年発行 東京大学出版会)
- 『現代語訳 魏志倭人伝』松尾光著(2014年発行 株式会社 KADOKAWA)
- 『新訂 魏志倭人伝・後漢書東夷伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』石原道博編訳(1985年新訂版発行 岩波文庫)
- 『中国史(上)』宮崎市定著(2015年発行 岩波文庫)
- 『隋の煬帝』宮崎市定著(2003年改版発行 中公文庫)
- 『科挙』宮崎市定著(2003年改版発行 中公文庫)
- 『魏晉南北朝』川勝義雄著(2003年発行 講談社学術文庫)
- 『世界の歴史⑥ 隋唐帝国と古代朝鮮』礪波護・武田幸男著(2008年発行 中公文庫)
- 『中国文明の歴史 4 - 分裂の時代 - 魏晉南北朝』森鹿三責任編集(2008年発行 中公文庫)
- 『古代朝鮮』井上秀雄著(2004年発行 講談社学術文庫)
- 『史記7 列伝三』司馬遷 小竹文夫・小竹武夫訳(1995年発行 ちくま学芸文庫)
- 『史記列伝(四)』小川環樹・今鷹真・福島吉彦訳(1975年発行 岩波文庫)
- 『史記世家(上)』小川環樹・今鷹真・福島吉彦訳(1980年発行 岩波文庫)
- 『正史 三国志4 魏書IV』陳寿 裴松之注 今鷹真・小南一郎訳(1993年発行 ちくま学芸文庫)
- 『新版世界各国史2 朝鮮史』武田幸男編(2000年発行 山川出版社)
- 『白帝社アジア史選書 広開土王碑との対話』武田幸男著(2007年発行 白帝社)
- 『朝鮮の歴史 先史から現代』田中俊明編(2008年発行 昭和堂)
- 『韓国の歴史』李景珉監修 水野俊平著(2007年発行 河出書房新社)
- 『東アジア文化圏の形成 日本史リブレット7』李成市著(2000年発行 山川出版社)
- 『古代の日本と加耶 日本史リブレット70』田中俊明著(2009年発行 山川出版社)

『古代国家はいつ成立したか』 都出比呂志著(2011年発行 岩波新書)

『日本の誕生』 吉田孝著(1997年発行 岩波新書)

『飛鳥・奈良時代』 吉田孝著(1999年発行 岩波ジュニア新書)

『日本書紀(上・下)』 宇治谷孟訳 (1988年発行 講談社学術文庫)

『東洋文庫 372 三国史記1』 金富軾著 井上秀雄訳注(1980年発行 平凡社)

『東洋文庫 425 三国史記2』 金富軾著 井上秀雄訳注(1983年発行 平凡社)

『完訳 三国遺事』 一然著 金思燁訳注(1976年発行 朝日新聞社)

〈〈 資料提供協力 〉〉

『七支刀画像』 (石上神宮)